

全国美術部門

会報 NO.38

編集・発行
委員長
総務局長
総務局事務部長
事務部

全国美術部門総務局広報室
橋本光明（信州大学教育学部）
山田一美（東京学芸大学）
佐藤聡史
〒389-0403 長野県東御市御牧原 17794-2
TEL 090-2560-5998 FAX 0268-61-6162
E-Mail : daibumon@po15.ueda.ne.jp
URL : <http://saeu.arrow.jp/wiki.cgi>

新たな部門活動の幕開け

全国美術部門委員長 橋本光明(信州大学)



昨年の9月26日に開催された愛知大会における部門協議会でのシンポジウムと本年2月26日に開催されたフォーラム第1部のパネルディスカッションは、そこに係われた教科専門や教科教育の先生方の意欲的な取り組みによりまして教科内容学の多様で可能性に満ちた展開が期待でき、部門活動の新たな幕開けとなりました。

部門活動の復活を謳った私にとっては、短期間でこうした活動の実現を夢に等しいものと捉えていましたから、携われた委員や役員の皆様への感謝と喜びで一杯です。中でも私が部門委員長（22年度より部門代表）に就任した18年度から20年度までの3年間を支えてくださいました松浦昇副委員長は、当初から教科内容学の重要性を強調されてこられました。残念ながら18,9年度の旧体制下では、部門・学会の会員管理と会費収支等の事務処理などで大わらわであり部門活動の充実を視野に入れながらも取り付く島もない状態でした。

しかし、20年度からの新体制により年度末に教科内容学の検討WGを松浦先生に託すことができました。21年度からは、福本謹一副委員長も参画し、6月の理事会においてWGは検討委員会に昇格し、3つ目の委員会として部門の重要な活動を担うことになりました。

この間、部門活動の活性化を望んでいました18年度の笠置三郎副委員長のご体調を配慮して19年度は、大宮康男副委員長が職務を継承されました。大宮先生には新体制においても副委員長として部門の再生と松浦先生と同様に、次期委員長の選考委員長も務めていただくとともに部門活動に明るさと元気を与えてくれました。

この4年間を振り返ると総務局長時代は、岡田匡史氏、藤田英樹氏の信州大、総務局長時代になると、増田金吾氏、山田一美氏の東京学芸大の2大学4人の方々にお世話になりました。改革を旗印に掲げた私の無理難題を一手に背負いながらもその旗竿を握りしめながら次へ引き渡されたお陰で今日があります。同時に、その足場を固めていただいた新関伸也部門総務部長はじめ総務局委員・部員、事務部、

そして、各委員会の委員とたくさんの方の貴重なご意見やご助言をいただきました350名を越す部門会員の皆様にお礼を申し上げます。

部門3委員会は、大学を取り巻く厳しい環境において、もはや手をこまねているのではなく、積極的に活動を行い関係当局や一般に向かって発信していかなければなりません。教科内容学検討委員会は、教員養成の使命に立ち返った独自性のある教育課程の改善を目的に教科専門の授業内容の見直しと構築、教科教育との連携・一体化、学校教育の視点による内容改善等、課題は山積しています。開設したブログや公開協議会等で多くの会員を巻き込みながら改善への共通項を見出せるようさらなる活躍を期待しています。

教大協も22年度から教科内容学に関するプロジェクトを発足します。この動きを敏感に感じ取り本委員会の成果を報告書や書籍、大学教科書等の刊行で可視化し、私達の研究活動をアピールしたいものです。

部門として昨年11月に全造連の傘下として中学校美術教諭全校配置の要望書を文科省等に提出しましたが、関連する全造連大学委員会（部会改め）は、私学組織の全美協と一層の連携を深めて、学校教育との関係、教職実践演習や教員免許更新制、6or5年制養成、教職大学院等について資質、ニーズ、経費等の面から意見交換し合い、教科内容学検委との協働も視野に入れた活動の展開が必要と思われます。また、附属学校園の在り方や活用方策等、改善を迫られている時期の附属学校委員会の活動も非常に重要になってきました。

22年度は部門協議会・総会を武蔵野美術大学で開催する歴史的な時を迎えます。柔軟性と開放性に挑む発展性のある部門活動を願い、退任の挨拶とします。

■平成 21 年度全国美術部門

愛知大会報告[総会・協議会等]

総務局長 山田一美(東京学芸大学)

部門愛知大会は、大会前日 9 月 25 日(金)から始まり、大会当日の 26 日(土)にメインの総会・協議会シンポジウムが行われた。特記事項として 25 日の部門会議において、藤澤英昭常務理事から中学校美術科専任教師の全校配置に関する要望書に関する提案があり、その後の検討を通して成案文を全国造形教育連盟委員長、全国美術部門委員長、全造協委員長の連名で文部科学大臣及び各教育委員会委員長宛をもって関係機関に提出した。(末尾に「要望書」一部掲載)

26 日の部門総会では、報告事項及び協議事項が承認された。それに引き続き、新たに教科内容学検討委員会の活動を中心にメンバーがパネリストとなってシンポジウムが生まれ、教科内容学の背景や課題、検討方向について中間的な話題提供がなされた。

I. 「大会前日」の部門関係会議

日時：2009 年 9 月 25 日(金) 13:00～18:00

会場：ナディアパーク国際デザインセンター 3 階・デザインホール

13:00 総務局会議(6 階セミナールーム 1)

14:30 第 2 回全国美術部門会議(6 階セミナールーム 1)

教科内容学検討委員会全体会・同各部会(共同研究会議室) 委員長
松浦 昇(金沢大学)

16:00 第 2 回拡大理事会(6 階セミナールーム 1)

17:30 教科内容学検討委員会報告会(6 階セミナールーム 1)

II. 「大会当日」の開会式・総会・協議会シンポジウム

日時：2009 年 9 月 25 日(金) 10:30～11:40

会場：ナディアパーク国際デザインセンター 3 階・デザインホール

<開会式>10:30 司会進行 松本昭彦(愛知教育大学)

1. 開会の辞・・・・・・部門副委員長 大宮康男(静岡大学)

2. 開催大学代表あいさつ・・・・部門大会運営委員長 宇納一公(愛知教育大学)

3. 開会あいさつ・・・・・・部門委員長 橋本光明(信州大学)

<総会>10:40～11:00

1. 議長団選出 議長：山本朝彦(鳴門教育大学)、副議長：横尾哲生(埼玉大学)



美術部門総会



シンポジウム



満員の会場



ポスターセッション

2. 報告・協議

〔報告事項〕

- (1) 平成20年度事業報告 20年度総務局長 増田金吾（東京学芸大学）
- (2) 平成20年度決算報告 20年度部門総務部長 山田一美
- (3) 平成20年度監査報告 20年度監事 石川 誠（京都教育大学）
上野行一（高知大学）
- (4) 全国美術部門総務局構成員の紹介 委員長 橋本光明（信州大学）
- (5) その他

〔協議事項〕

- (1) 平成21年度事業計画（案）21年度総務局長 山田一美
- (2) 平成21年度予算（案）21年度総務局部門長 新開伸也（滋賀大学）
- (3) 全国美術部門の組織・運営等について 委員長 橋本光明
- (4) 平成22年度部門大会の開催 委員長 橋本光明
- (5) その他

3. 議長団解任

4. 閉会の辞 ・ ・ ・ ・ ・ 副委員長 福本謹一（兵庫教育大学）

<全国美術部門協議会シンポジウム> 11:00～11:40

○テーマ「教科内容学は美術教育を進化させるか？」

パネリスト 永守基樹（和歌山大学）、渡辺邦夫（横浜国立大学）
石井壽郎（東京学芸大学）、山木朝彦（鳴門教育大学）
コーディネーター 松浦 昇（金沢大学）



□以下、「要望書」の一部* * * * *

平成21年11月26日

文部科学大臣 川端 達夫 殿

各都道府県・政令指定都市教育委員会委員長 殿

全国造形教育連盟

委員長 永関 和雄 印

日本教育大学協会全国美術部門

委員長 橋本 光明

全国大学造形美術教育教員養成協議会

委員長 水島 尚喜

中学校美術科担当専任教諭の全校配置推進に関する要望書

現在、中学校美術の時間数が削減され、中学校での美術の時間は、生徒の日常に関わらない授業のみ行う非常勤講師や、美術の免許を持たない教師が教えているという脱法行為に近い事実があります。このことは誠に憂慮すべき事態であり、わが国の将来に致命的な深傷を与えると同時に禍根を残すことは目に見えています。

ここに全国造形教育連盟、日本教育大学協会全国美術部門、全国大学造形美術教育教員養成協議会の合意の下に本文書を取りまとめ、美術教育にかかわる大学、高等学校、中学校、小学校教員の総意として、関係閣僚、各都道府県・政令指定都市教育委員会に、「中学校美術科担当専任教諭の全校配置」実現のため、ご尽力賜りますようお願いいたします。

記

- 1. 全国の中学校に1人以上の美術科担当専任教諭を配置すること
- 2. 中学校教諭免許（美術）を有する専任教諭が美術科授業を担当すること

* * * * *

■各種委員会より(最終報告)

■日本教育大学協会全国美術部門・教科内容学検討委員会 第3回委員会議事録<その1>

記録・文責：渡辺邦夫

○日時：平成22年3月14日(土) 13時半～16時半(3時間)

○会場：東京学芸大学美術棟2階・美術教育演習室(芸・スポ学系研究棟4号館)

○議題：各分野/基礎基本 map(案)及び教科内容学検討の今後の方向性について

《その1》(※《その2》は次号に連載。)

1. 出席者：松浦昇(委員長・デザイン部会・金沢大学)、小澤基弘(絵画部会・埼玉大学)、石井壽郎(工芸部会・東京学芸大学)、古瀬政弘(工芸部会・東京学芸大学)、山本朝彦(教科教育部会・鳴門教育大学)、永守基樹(教科教育部会・和歌山大学)、福本謹一(教科教育部会・兵庫教育大学)、神野真吾(美術史美術理論部会・千葉大学)、前田英伸

(デザイン部会・北海道教育大学)、内藤隆(デザイン部会・鳴門教育大学)、渡辺邦夫(デザイン部会・横浜国立大学)

2. 議論に先立ち松浦委員長から、池川直(彫刻部会・鹿児島大学)の本委員会委員辞退のお話があった。欠席の彫刻部会を除く実技教科専門各部会の基礎基本 map(案)の提示および説明の指示があった。

○【絵画部会】小澤部会代表から資料に基づき説明があった。図は…アートを頂点、或は始点とし次第に分岐し枝分かれして行くツリー状の系統図でアート～受信者、発信者に先ず2分岐し、受信者は鑑賞者として受動的鑑賞者と能動的鑑賞者へ2分岐後、更に詳細に分岐している。一方、発信者は、つくるとは何か/何をつくるのか/何故つくるのか(目的)/どうようにつくるのか/どのように見せるのか5分岐～詳細に分岐する『絵画の教科書』編纂時の基本概念図であり、所謂一般的な絵画領域のみならず彫刻/版画/写真/アニメーション/映画/インスタレーションにも分岐し、多様化する現代アートの概念形成と構造の実際を受信者/鑑賞側、発信者/制作・発表・方法論を網羅しており図の作成

意図が解説された。

○【デザイン部会】渡辺部会代表から資料に基づき説明があった。図は…観察力/表現力/思考力の3つの基礎概念を3つの楕円の重なりでデザイン(特に基礎デザイン)の位置や内容を示す。観察力には…美的感性、イメージ、アナログ、描画/彩色画/イラストレーション、客観写生を主とするデッサン、彫塑/模刻がある。表現力には…透視図法、写真、デジタル、レンダリング、モデリング、CAD・CG、プレゼンテーションがある。思考力には…デザイン概論、コンセプト、サーベイ、ブレインストーミング、発想力がある。そして、観察力と思考力の重なりに『色』色彩理論/配色、思考力と表現力の重なりには『形』図法製図/作図、観察力と表現力の重なりには『造形』色彩構成/立体構成があり…それら3つがデザイン実技を中心に支える。図の外側には…人間/自然/社会の3つの座標軸、更に学問/美術=基礎となる純粋美術領域/技術の3つの座標軸があり、社会的背景となる関連各分野が付記されており図の作成意図が解説された。

○【工芸部会】石井部会代表から資料に基づき説明があった。図は…自己を中心に、外側に過程、その外側に社会(世界)、その外側に時間(運動)がある同心円で工芸領域を表している。自己には…実感/想像力/創作根拠(必要性)/手から始まる表現/触覚/気づき(自発的な)/配慮/手の延長/意味の構築/勘所/見る(認知)が、過程には…素材/手がかり/身体性/仕事の中の学び/創意工夫/改良性/修練/道具/思考錯誤/技法/アフォーダンス/状況論/行為/工程/道理/まねぶ(試行)が、社会(世界)には…無垢な創造性(自己の介在しない)/物体を基にした自己の対象化/仕事/自然/日常性/生活/機能/場/手がかり/素材/価値表象(意味)の語彙が入れられており図の作成意図が解説された。

3. 領域の提示した基礎基本 map(案)説明の後、教科内容学委員会による一冊の本、例えば『大学に於ける美術教育の教科書(仮称)』という具体的な到達目標についての話があった。具体的目標があって始めて方向性や手段も明確になるとの指摘もあった。しかし、議論は其処へ至る為の教科内容学構築の基本理念が問われ…2時間以上に及ぶ極めて闊達な議論があった。以下、発言順に時間系を追って議論の推移を要約する。

○今、説明のあった基礎基本 map (案) への質疑や補足説明等があればお願いしたい。そして、出来れば教科教育と教科専門の接点を大切にしながら論議を進行して貰いたい。(松浦)

○実は私には疑問がある。この会議の意義について私自身がよく理解できていない。この委員会=会議の意味について明らかに説明して貰いたい。(小澤)

○私が一番興味を持ったのは、石井先生がご提示の自己を中心として、社会へと発展する図だ。それは、ローウェンフェルド『美術における人間形成』に掲載されている図に通じるものがある。各ジャンルのティンブリンを持ちつつ美術全体を見通す美術教材の map も作れるのではないか。しかし、歴史的経緯の中で、教科書や指導要領の変遷が生み出し、成果として蓄積したなかで変えようの無い基礎もある。今回、示された3つの図を見た印象では、全体的に大学で学ぶべき基礎基本と想定されているレベルがあまりにも高度過ぎる。小中学校の教育現場で実際の教諭が行う授業や教材レベルとあまりにも乖離し、飛躍し過ぎているのではないかという危惧を感じた。(山木)

○この図を高度なものと捉えられては困る。このツリーはあくまで項目を列記した図に過ぎない。この項目には未だ描ききれない様々な内容が含まれている。それぞれの実技分野の本質を知ること→表現すること→試行錯誤すること→育成・飛躍こそが学びや教育にとって大切なのではないのか。(小澤)

○大学で学んだ学生(学習者)達は、教師として教育実践を行なう際に、はたして大学で学んだことを十分に活かしているといえるのだろうか。これまで、大学教員は自分が教員養成大学で養成した学生達が現場の教師として、どのように大学での学びを現場で活かしているのか、検証を怠らなかったのだろうか?そのような構えで、大学の授業を自己チェックしてきたのだろうか。(山木)

○実技教員がより高度なレベルの教育を目指したい気持ちはよく解る。それによって…より高い次元の美術教育を現場教師が出来るようにと願って来たのだから。だが一方、例えば教育実習にしても研究授業にしても、又、育てた教員が教育の現場でどのように悩み、或は、成長して来たのかについて、我々実技教員は教科教育の先生方に任せきりだったのではないか。実技教員は、まるで鳥が雛を育てるように大学で実技は教えても…自分で餌を取れるようになったら放つからかして来た反省に立つべきではないか。これは愛知大会で発言…我々は直接社会を教育しておらず育てた教員によって間接的に社会を教育していると自覚せねばならない…に繋がるのではないか。ここで教科専門と教科教

育の接点を失ってはいけない。まるで(相撲の)行司みたいだが…教科内容学というこの共通の議論の場で…折角、論議している意味を我々は新たに考え直してはどうか。(渡辺)

○近年、教員養成系の定員削減で、いくつかの大学では教科専門と教科教育の兼任が増えているようです。教員の少ない私学の場合などでは、以前よりそうだったのですが、教科専門 vs 教科専門の図式は、あまり意味が無くなりつつあります。互いの領域の連携や相互浸透は、これからの必然的な流れに思えます。経験的にも、教科専門の能力に長ける教員は、教材開発能力にも長けているし、又、教え方、話し方、授業の組立て方も上手い方が多いようです。実技系などの教科専門と教科教育の関係はとても密接ですし、将来は「二足のわらじ」が当たり前になるかも知れません。そういう意味でも教科内容学の論議を深めていきたい。(永守)

○先に提示説明した図は一般論化した図であって…此処に別資料があるので皆様にお示ししたい。(小澤)

■『美術教科内容学の構築の方向性(案)』

1. 「創造性」という観点→各分野の制作学→全分野に共通する内容学の明確化へ
2. 各分野の夫々の「○○学」的観点
3. 各大学での教育実践例の紹介
4. 学校教育への可能性の4つの側面からのアプローチ案が示され解説があった。

○個と制作、或は、美術全体デザインのように人間/社会/自然等、とても広大なジャンルを捉えなければならない領域もある。絵画/彫刻/工芸/デザインそれぞれの領域の持つ特性や存在価値を明らかにし…且つ4つの実技教科専門領域の関係を明らかにし…(教科教育を含めた)美術教育の全体性について、一番、今から話し合って行かなくてはならない課題なのではないか。(永守)

○フォーラムの話としては…絵画であれば、絵画制作学と絵画学(客観的知)の2つが両軸両輪として回って始めて学問として成立している。それは、他の領域、彫刻/工芸/デザインでも必ず繋がっていて共通している筈だ。(小澤)

○大学で高い次元の教育を受けた現場教員が中学校や高校のレベルの美術であれば、確かに地域の中で指導者として活躍することも有り得る。実は私もその実感を持っている。しかし、小学校で考えた時、大学で従

来行なわれていた教育が優れた指導者を輩出してきたという認識は…実は危うく、私たちが担保できない認識なのではないか。過去の成果を否定するつもりは全くないが、内容学の立場から教材開発力や優れたカリキュラム開発を批評するような能力を育てて行く内容学の新たな基軸を作れないか。(山木)

○教員養成大学・学部で学生に獲得させるべき最重要の能力は、第一に教材開発力、第二にカリキュラム批判力であろうと思っています。大学における教科専門の先生方の授業は、題材(教えるべき美術の価値)を「教材化する」ことのプロトモデルとして教育的に機能しているのではないのでしょうか。「教材化」するということが、クリアーに学生に伝えられれば良いわけです。とは言え、学生はもちろん大人であるのですが、美術の世界を教育へと志向させていく時、その美術と教育との出会いのビジョンの中に「子ども」が視野に入っているか否かと云う点は、教科内容学としては、問われるのでしょうか。(永守)

○今、子どもや幼児の世界観の話があったが…その辺りは小学校の「造形遊び」とはどう関連があるか。(松浦)

○ティピカルな題材や教材に関する提示が大切になるのではないか。典型的なものでもいかに具体的な教材の提示が必須になって来るのではないか。(山木)

○小澤先生の示したツリー状 map は文科省あたりが教科教育を示す図に非常に近いものを感じる。例えば調塑関連で云うと小学校低学年では粘土を使い「4つ脚の動物」、中高学年になると自立させるのが困難な「2本足で立つ人物」、中学校になると「心材を使った人間像」と…段階的に高度になるように構造化されたカリキュラムがあったが…近年、新開発された新素材、例えば軽くて強い紙粘土の登場によって大きく様変わりしている。そのような変化の中で…教科専門の教科教育化、教科専門と教科教育の連携モデル、教科教育の教科専門化…が考えられる。それは…子どもの論理を優先して考えて行くのか、造形世界を優先して考えて行くのかなのだが…実は双方共に大切になって来るのではないか。(福本)

○小学校教育では特に単なる図工のみならず、他の教科における学びが、それぞれの教科と連動して子どもたちが発達し成長するというカリキュラムや教育方法が大切だとみなされている。そのような観点からも、図画工作や美術はその教科内容を子どもたちの視点から(総合的な発達の観点から)見直すべき時期に入っているのではないか。(山木)

○我々は少なくとも上から目線であるつもりは無いが…子どもの論理と云うものに一体、どうやって立つのか?立てるのか?或は確信的に子ども

もの論理に立って考えているという実感が持てるのか?そこが解らないし知りたい。(小澤)

○その質問は…教科教育の論理とは何か?になるのだが…教科教育は現場教師の教育、授業観察、子どもたちへの接近、関わりの経験値が必要になる。(福本)

○表現者が教育者になる時…子どもたちはお客さんなんです。子どもたちにとっては…教科専門も教科養育も関係はない。子どもにとってはダ・ヴィンチだって全然、関係ない。そんな人のことは全く関係ない。子どもを教える時…石井壽郎は何が専門とかではなくて単なる石井壽郎でしかない。人間にとって自分以外は他者だし自分以外は世界でしかない。我々、委員になった者は皆夫々の専門家でしかない。だから、我々が教科内容学を作るしかない。子どもが成長することは社会化することで美術という教科こそが自己を確立して行く為に最も必要な教科だと思うし、美術は教育界の牽引者と成り得る。例えば画家が絵を描く…それは一体、何かというと…社会が要求してない必要じゃないのに絵を描いている…それが絵描きなんです。さっき実技力の有る人は良い教師たりえるとか云う話があったが…だからこそしっかり制作し、御自身と向き合っている人間は良い教授をする可能性があるので…本気でしっかり翻訳する気になって頂きたい。(石井)

○積極的に教育現場に出て行って子どもへの美術教育の経験値を積んで…教材の批判とか批評を構造的に出来るようになる能力を高めて行くことが実技教員の我々に求められていると云うことになるのですかね。(小澤)

○例えば絵を描いて展覧会をやって…絵が好きだとコミュニケーションするのは凄く簡単だが…全然、絵が好きでない人だと困る。子どものことを考える意味で絵画という共通言語を待たない他者の側を考える必要がある。子どもは異文化人であって…我々が持っている知識経験を解るように説明し教えてあげなければならないということであって…子どもも他者も同じことだ。(石井)

○今回、示された図は…実はこうなっており(デザイン/工芸 map (案)の上にアートのツリー図(案)を垂直に立てて見せながら)…縦と横で再構成が出来ると思います。これから、どう進めればいいのかと云うと悩みますね。(内藤)

○例えば、石井先生が工芸というジャンルを背負っているんじゃなくて、一人の表現者として教えれば良いという趣旨のことを言われたが、夫々がご自分の探求してきたことに照らして構想したことを教育されればよいのではないか。近年、注目されている OECD 加盟国が行う PISA 調査

等は、我々がもっと意識して活用すべきではないか。(山木)

松浦委員長から自己紹介を兼ねて神野委員に発言が求められた。

○千葉大学の神野です。美学・文化社会学が専門です。一般に美術理論・美術史の先生方はあまり教科内容学には関心が無いのではないかなと感している。この分野も含めて美術教育で問題とすべきなのは…文化としての美術を伝えるということと、感性的な思考力認識力を開発するという点が、一緒にたにされている点で…それぞれの共通認識をもてる部分を教科内容とすべきではないか。本会議の議論は非常に古典的な正統的な話題で…個々の優れた個性的教員が芸術創造を通して到達した境地を学生に伝えるというのは確かに理想的だが…はたして大学教員が全てそうした存在と言えるのか、そうした境地に簡単に到達することが難しい、又、そうしたものを学生達に求めることが大学教育の中で本当に可能なか…ということが問題とされるべきだ。例えば鑑賞教育も混乱は有って、取り上げる作品が果たしている作品なのかといった疑問もある。この会議の論議レベルを、学生達は実は理解できないのではないかという思いがある。かつて美術は建築やデザインに大きな影響を与える存在であったが、現代ではデザイナーや建築家の方が…大きく社会を変容させる力を持っているように見えるし思われている。最近では、ネット上で何の美術教育も受けていない素人でもいきなり凄い作品を作り投稿する者が現れる状況だ。そうした時代状況下では「作る」という意味も変わりつつあるのではないか。伝統的なものづくりにはばかり拘泥しては美術の社会的な価値や必要性は増々危うくなるのではと思う。(神野)

○全くその通りだ。PC やソフトの急速な進化によって…先程からの熱い基礎からの実技教育的な修練とは大きく変容しつつあると認識せねばならないのは確かだ。(渡辺)

○時代の変化で制作感が変わって来たとしても…制作中の瞬間的な飛躍や充実感=喜びの感覚こそが大切であって、制作を通して学び手が変化し成長することの本質は変わっていない…そこが無ければ作品を作る意味が無い。(小澤)

○文化としての美術の中に手間を掛ける…例えば、何時間、石に向かって制作をしていたかが評価されるべき価値だ…の様な誤解がある。寧ろ石から離れて始めて見えるし解るという瞬間さえあるのではないか。多様性としてのアプローチする方法や学びの本質的理解を教員が見せられる能力も必要だろう。(神野)

○そこをそれぞれの指導者は自分の中に落とし込んでいても…人に示して行けない。教育の中でそこを敢えて強く言っていない。きっちと明文化されていないように感じる。そこやると…全部に繋がる人間学になる。先程の…Self-respect の感覚『自分自身に対して尊敬できる感覚』がそこに抱ける…に繋がる。それが制作者には勿論必要だが、教育にも必要になって来ると思う。(小澤) ここで山木委員から、別件で用意していた資料の中から教科内容学にかかわる参考資料スライドのプロジェクト提示が行なわれた。

○PISA が求める能力論は、単に、数理解理や読解力といった単純なものでは無く、簡単に整理すると次のようなキー・コンピテンシーが掲げられている。

* * 以下、会報次号に連載 * *

■全国造形教育連盟大学部会の今後をめぐって

日時：2009年9月25日（金）13:30-14:15 「愛知大会」前日

会場：ナディアパーク・デザインセンタービル3階、セミナールーム3（名古屋）

出席者：14名（以下、順不同）

・部門全造連大学委員会委員／橋本光明（信州大学）、山田一美（東京学芸大学）、高石次郎（上越教育大学）、相田隆司（東京学芸大学）

・全美協委員／水島尚喜（聖心女子大学）、山中隆（華頂短期大学）、北澤俊之（東洋大学）、富安敬二（立教大学）、清水満久（昭和女子大学短期大学部）、矢野真（京都女子大学）、早矢仕亜晶子（岐阜聖徳学園大学）、久保木健夫（千葉敬愛短期大学）、戸潤幸夫（県立新潟女子短期大学）、阿部寿文（大阪女子短期大学）

【討議事項】

司会・進行を山田が行い、以下の事項について、フリートークを行った。

大学部会の今後／両二組織の交流の仕方／本年度の大学美術教育学会研究発表において、二名の全美協所属教員を招待発表すること。平成21年度は、①三澤一実氏（武蔵野美術大学）、②押元信幸氏（川口短期大学こども学科）／現在、口頭発表2枠を合同で用意している、一体的運営となっている。／発表の資格、学術登録団体への関心

○委員から発言

「全造連大学部会」との関係・位置づけについて／今後、本協議会を「全国大学美術教育連絡協議会」としてよいのではないかと。／連携を深めることが前提であり、協議会名等についてはその他の申し合わせ事項を含めて今後検討する。／＜意義＞国への主張、意見・提言をする必要から、国公立・私立を含め連携を深めること。／＜手続き＞全造連大学部会において、本協議会の動向・役割を承認する必要があること。／＜明文化＞申し合わせ事項として、明文化する必要ありではないかと。

○今までの経緯について

「全国造形教育連盟（全造連）大会」の前日に、2人（部門委員）と2人（全美教委員）、計4人の発表を行ってきた。しかし、全国美術部門としては、①部門委員の発表の主たる場合は、大学美術教育学会であること、②そのために、発表希望者が少ないこと、③全造連での研究発表会への出席者が少ないこと、④この研究発表会が形骸化してきたこと、などの理由

により18年度から発表者を派遣していない。以上のことから、今回から上記のとおり二名の全美協所属教員を本学会に招待発表することで全美教員の研究発表の機会を保障することにした。／情報交換の場として全造連全造連全造連。

○今後の進め方、在り方について

シンポジウムなどを利用して交流を深めていくべきであること。／「全造連大学部会」を解散してよいのではないかと。／「全造連大学部会」の解散には異論がある。／「合同協議会」という性格から、二本立ての性格をもつ会合のあり方を探るべきである。／解散ということは考えずに、過去の経緯を大事にして全造連と本学会での役割を明確にしながら両方の活動を活性化することが必要である。

（記録：総務局長 山田一美）

■全国美術部門北海道地区懇談会（報告）

日時：平成21年11月6日（金）14:30～15:05

主催校：岩見沢校（テレビ会議システムにて）

参加者：

札幌校1名佐藤昌彦、函館校1名小平征夫、旭川校2名（南部、名達）
釧路校（書面参加1名佐々木）、岩見沢校4名（福山、三橋、阿部、前田）

【協議内容】

1. 地区代表理事・委員選出に関するローテーション計画

以下の案で承認された。

20～21岩見沢校（福山先生）／21～22岩見沢校（前田）／22～23旭川校（南部先生）／23～24岩見沢校（阿部先生）／24～25釧路校（佐々木先生）／25～26岩見沢校（未定；美術コース教員から）／26～27札幌校（佐藤先生）／27～28岩見沢校（三橋先生）

2. 各ブロックに於ける学会全国大会の開催運営大学に関するローテーション計画

現在前田が東北地区理事の立原先生、煤孫先生とメールにて協議中である事、また、札幌校佐藤先生よりこれまでの理事会での議論の経緯について報告があり、前田が引き続きメールでの協議を行ない、結果が出次第各キャンパスに報告するものとした。

3. 各キャンパスの現状報告と改組後の北海道地区の教大協に対する対応 体勢の確認

釧路校佐々木先生より、書面にて現在1名だけの体制である事、来年度1名の補充が見込める事の報告があった。また、函館からは、美術教員は4名であるが、美術講座は存続しておらず、美術の教員免許も出せない状態であり、よってそれぞれ個人として学会への参加はするが、地区理事などの対応は不可能であるとの事であった。

報告者：北海道地区全国委員 福山博光・前田英伸（北海道教育大学岩見沢校）

■「美術部門会員の会費に関する細則（案）」 が承認される

先般開催された平成21年度全国美術部門協議会及び拡大理事会において、以下の細則が承認されましたのでご報告致します。

* * * * *

日本教育大学協会全国美術部門会員の会費に関する細則

第1条 本細則は日本教育大学協会全国美術部門規程第6条（会員）及び第11条（会計）に係わる会員が納入する会費について規定する。

第2条 会員会費は以下のとおりとする。

正会員 年額 3,000円

賛助会員年額 年額 10,000円（一口）

第3条 会員会費は原則として所定の郵便振込用紙により、毎年度6月に納入するものとする。

附則 本細則は平成22年4月1日より施行する。

* * * * *

■次期部門委員長（部門代表）・学会理事長に 藤江充氏が承認される

以下は、大宮康男委員長が学会通信2010月2月号に選考経過を報告したものである。選考経緯をお知らせするためここに引用する。

「次期部門委員長・学会理事長選考委員会報告 委員長 大宮康男（静

岡大学）

大学美術教育学会愛知大会終了後の2009年9月27日（日）の午後、部門副委員長福本・大宮、学会副理事長増田・大嶋、総務局長山田、部門総務部長新関、学会総務部長山口の7名で次期部門委員長・学会理事長の第1回選考委員会を結成し、大宮が委員長を拝命した。次の11月15日（日）に上野文化会館会議室で開催された選考委員会は全員一致で愛知教育大学の藤江充先生を推すことで合意したので、委員長が11月20日（金）に名古屋の第60回造形表現・図画工作・美術教育全国大会に助言者として出席されていた藤江先生にお時間をいただいてこの件を了解していただいた。」

その後、平成22年2月28日・お茶の水女子大学附属中学校における拡大総務局理事会、及び3月14日・東京学芸大学における第3回美術部門協議会と第3回拡大理事会において、大宮康男委員長より選考結果が理事・委員に報告された。これにより、平成22年度-23年度的美術部門委員長（美術部門代表）・大学美術教育学会理事長として藤江充氏（愛知教育大学）が全会一致で承認された。（文責：総務局長 山田一美）

■平成22年度 部門地区全国委員並びに大会運営委員

平成22年3月14日の部門協議会において、以下の地区全国委員・大会運営委員が承認されました。（H22.3.14現在）

○地区全国委員

I〔北海道〕 前田英伸（北海道教育大学岩見沢校21-22年度）
南部正人（北海道教育大学旭川校22-23年度）

〔東北〕 立原慶一（宮城教育大学21-22年度）
片野 一（福島大学22-23年度）

II〔関東〕 相田隆司（東京学芸大学21-22年度）
渡辺邦夫（横浜国立大学22-23年度）

III〔北陸〕 郷 晃（新潟大学21-22年度）
木村 仁（信州大学22-23年度）

〔東海〕 竹井 史（愛知教育大学21-22年度）
上山 浩（三重大学22-23年度）

IV〔近畿〕 鈴木幹雄（神戸大学21-22年度）
加藤可奈衛（大阪教育大学22-23年度）

〔四国〕 杉林英彦（愛媛大学21-22年度）

未定 (四国地区 22-23 年度)

V [中国] 高橋正訓 (島根大学 21-22 年度)

河野令二 (山口大学 22-23 年度)

[九州] 桶田洋明 (鹿児島大学 21-22 年度)

幸 秀樹 (宮崎大学 22-23 年度)

○大会運営委員 相田隆司 (東京学芸大学 21-22 年度)

立原慶一 (宮城教育大学 22-23 年度)

V [中国]

[九州]

○定年退職会員：井川惺亮 (長崎大学教育学部/絵画)・木下信義 (長崎大学教育学部/美術教育)・浜田民生 (宮崎大学教育文化学部美術教育講座/工芸)

以上、H22. 3. 14 調べによる。

■平成 21 年度美術部門会員の異動

(定年退職会員、新会員、転出入会員/地区ごとのあいいうえお順、敬称略)

異動の期間は H21. 4. 1~H22. 3. 31.)

平成 22 年 3 月に定年退職をされた部門会員の先生方におかれましては、これまでの部門活動へのご助力・ご尽力に対し会員一同心からお礼を申し上げます。

I [北海道]

○定年退職会員：山本勇一 (北海道教育大学岩見沢校/西洋画)

[東北]

II [関東]

○定年退職会員：藤沢英昭 (千葉大学教育学部美術科/造形教育)、○新会員：片口直樹 (茨城大学教育学部美術教育教室/絵画)・小橋暁子 (千葉大学教育学部美術科/美術教育)・林 耕史 (群馬大学教育学部美術教育講座/彫刻)・速水敬一郎 (東京学芸大学美術・書道講座/日本画)・本田悟郎 (宇都宮大学教育学部美術教育講座/美術教育学・芸術学(美術史、美術理論))・○転入会員：池内慈朗 (埼玉大学教育学部美術教育講座/美術科教育)・石上城行 (埼玉大学教育学部美術教育講座/彫刻)・内田裕子 (埼玉大学教育学部美術教育講座/美術科教育)

III [北陸]

○定年退職会員：福岡奉彦 (上越教育大学芸術系教育(美術)/油彩画・銅版画)、○新会員：坂本太郎 (福井大学地域科学部)・蛭田 直 (信州大学教育学部/インターフェースデザイン)、○転出会員：池内慈朗 (福井大学から埼玉大学に転出)

[東海]

IV [近畿]

○定年退職会員：那賀貞彦 (大阪教育大学教養学科芸術専攻芸術学コース/芸術学・美術教育学)・比留間良介 (奈良教育大学教育学部/絵画)

[四国]

■全国美術部門平成 20 年度事業報告

[平成 20 年度]

4 月上旬~中旬 役員及び総務局委員委嘱交渉

4 月 26 日 第 1 回総務局委員会、総務局拡大理事会 (東京文化会館)

5 月 18 日 第 2 回総務局委員会 (淡交社 東京支社)

6 月 21 日 第 1 回全国美術部門委員会 (東京文化会館)

6 月 30 日 部門会員に関する文書及び「高知大会」第 1 次案内を各大学宛発送 全国美術部門通信同時発送

8 月 3 日~5 日 全国造形教育連盟・「InSEA 世界大会」記念全国図画工作・美術教育研究大会 in 大阪 (大阪府教育会館・大阪教育大学附属平野小学校)

8 月 3 日 全造連大学部会総会 (大阪府教育会館)

8 月 5 日~9 日 第 32 回 InSEA (国際美術教育学会) 世界大会 in 大阪開催 (大阪市・大阪国際交流センター)

10 月 13 日 第 3 回総務局委員会 (東京学芸大学)

11 月 1 日 平成 19 年度会計監査、第 2 回全国美術部門委員会 (高知大学)

11 月 2 日 全国美術部門「高知大会」開催 (高知大学) 部門・学会開会式、部門協議会、部門・学会合同懇親会等

11 月 3 日 開催大学引継ぎ (高知大学-愛知教育大学)

[平成 21 年]

1 月 30 日 日本教育大学協会全国研究部門連絡協議会 (東京学芸大学)

1 月 31 日 第 4 回総務局理事会 (東京学芸大学)

3 月 13 日 第 3 回全国美術部門委員会 (東京文化会館)

3 月 20 日 平成 20 年度部門会報 No. 36 刊行

■全国美術部門平成20年度決算報告

平成21年9月25日

収入				
費目	平成20年度予算	平成20年度決算	増減	備考
1 前年度繰越	332,234	332,234	0	
2 会費収入	1,098,000	1,086,000	-12,000	362名
3 教大協助成金	80,000	80,000	0	
4 受取利息	120	319	199	
5 収入合計	1,510,354	1,498,553	-11,801	
支出				0
6 全国評議会補助金	700,000	700,140	140	
7 会報刊行費	40,000	25,000	-15,000	
8 名簿刊行費	40,000	0	-40,000	
9 研究会参加補助費	0	0	0	
10 特別調査費	0	0	0	
11 全造連関係	20,000	0	-20,000	
12 協議会講演会費	0	0	0	
13 常任委員会費	0	0	0	
14 全国委員会費	50,000	42,840	-7,160	
15 各種委員会費	70,000	9,500	-60,500	
16 委員等経費	100,000	127,464	27,464	
17 拡大委員会補助金	0	0	0	
18 事務局交通費	100,000		-100,000	
19 通信費	20,000	6,200	-13,800	
20 事務費	50,000	45,298	-4,702	
21 雑費	10,000	5,000	-5,000	
22 予備費	310,354	55,674	-254,680	
23 事務局業務委託費	0	96,000	96,000	
24 支出合計		1,113,116		
25 次年度繰越		385,437		

日本教育大学協会全国美術部門

委員長 橋本光明 様

平成20年度日本教育大学協会全国美術部門の会計につき、平成21年9月14日に、監査委員会を開催し、会計監査を実施しました結果、

- 1 収支について伝票類と帳簿類を対照監査した結果、それらが正確に仕分け、記帳されておりました。
- 2 収支の伝票類と帳簿類は整理され、収支の内容・使途も明確に記帳され、会計が適切に処理されていました。
- 3 帳簿差引残高及び貯金・現金残高と決算書との対照も行いましたが、正確であることを確認しました。

以上、平成20年度会計処理、決算が正確に行われたことを報告いたします。

平成21年9月14日

日本教育大学協会全国美術部門

監事 上野 行一 印

監事 石川 誠 印

※付記：

上記、決算報告書並びに監事による報告は、平成21年9月26日開催の平成21年度部門総会において、承認されております。

■事務局より

- 1 平成22年度の全国大会、投稿論文案内、会費納入についての発送を5月末に予定しております。会費の納入期限は、7月末とさせていただきますので、期日までに手続きをいただくようご注意ください。特に公費扱いで処理される皆様は、期日までに納入できない場合は事前に事務局へ予定をお知らせください。
- 2 平成22年度会費納入時、平成21年度以前の未納がある方については合算して納入していただきます。振込用紙に事前に印刷して発送いたしますので、よろしくお願ひします。
- 3 3月末で退職や異動された方がおられる場合、ご本人からの連絡がないこともありますので、念のため該当者がおられる大学の方は事務局へ連絡を入れてください。事務局では完全な把握ができませんのでご協力をお願いします。
(事務部長 佐藤聡史)

■平成22年度全国美術部門会議（ご案内）

○日時 平成22年9月18・19日

○会場 武蔵野美術大学（東京・小平市）

【9月18日（土）】全国美術部門役員会・諸委員会・役員委員懇談会

【9月19日（日）】全国美術部門総会・協議会・合同懇談会

平成22年度日本教育大学協会全国美術部門協議会・第49回大学美術教育学会タイムテーブル（案）

9/18（土）				
12：30～	受付			
13：00～18：00	全国美術部門会議、拡大理事会、各種委員会 / 全美協議会 / 大学部会 [詳細は次案内]			
18：00～20：00	懇親会 12号館MAU食堂			
9/19（日）				
9：00～	受付			
9：30～9：50	教大協部門総会			
9：50～10：20	教大協部門協議会「平成21年度教科内容学校討委員会のまとめと論点整理」			
10：25～10：35 第49回大学美術教育学会開会式				
移動				
10：45～12：10	シンポジウム① 教科内容学は教科の未来を語るか *コーディネーター 小澤基弘 (埼玉大学)	シンポジウム② 美術教育の新たな動き-アートプロジェクトを中心に- *コーディネーター 神野真吾 (千葉大学)	シンポジウム③ 全国美術教育学生会議「大学の美術教育を考える」*コーディネーター 林耕史 (群馬大学)	シンポジウム④ 美術教育における幼年初次教育の役割 *コーディネーター 大橋功 (NPO学習開発研究所副代表)
12：10～13：00	昼休み 協賛各社展示 12号館フロア			
13：00～14：25	パネルディスカッション「美術教育の明日を考える」 シンポジウムコーディネーターがパネラーとなりテーマについて提案する。 *コーディネーター 小泉晋弥 (茨城大学) パネラー 小澤基弘×神野真吾×林耕史×大橋功			
移動				
14：30～14：55	ポスター発表			
移動				
15：00～15：30	口頭発表 5室×6コマ			
15：30～16：00				
16：00～16：30				
16：30～17：00				
17：00～17：30				
17：30～18：00				
18：10～20：00	懇親会 鷹野台ホール			
9/20（月）				
8：50～9：20	受付			
9：20～9：50	口頭発表 5室×6コマ			
9：50～10：20				
10：20～10：50				
10：50～11：20				
11：20～11：50				
11：50～12：20				
12：30～13：30	学会総会 *			

*会員以外の非会員もオブザーバー参加できます。出席者には軽食がです。

「部門会報 第38号」

○総務局広報室

○小泉 薫 (お茶の水女子大学附属中学校)

・大泉義一 (横浜国立大学)

・芳賀正之 (静岡大学)

・内田裕子 (埼玉大学)

・山田一美 (東京学芸大学)